

5月例会報告

【日時・会場】2002年5月11日(土) 月例会 13:30~15:45 (施設見学 14:50~)

注) その後は、総会 15:50~17:40 → 懇親会 18:20~0:30 十条駅周辺飲食店

【参加者(会員)】麻生征宏(学習研究社) 上間匠(東京大学教育学研究科) 宇都宮徹壺(写真家)
浦和俊介(名古屋大学国際開発研究科) 大松暢(佐藤工業) 高妻容一(東海大学) 笹原勉(日揮)
田中俊也(三日月整形外科) 津田綾女((株)クラブハウス) 内藤隆(横河F C) 仲澤眞(筑波大学
体育科学系) 中塚義実(筑波大学附属高校) 中村敬(サッカーコーチ) 堀美和子(国立スポーツ
科学センター) 本多克巳((株)クラブハウス) 松岡耕自(立命館大学国際関係研究科) 水上潔(日
立製作所) 宮崎雄司((有)オフィスアステカ代表/サッカーマニア編集長)

【参加者(未会員)】石森真由子(仙台大学大学院) 岩村聡(筑波大学大学院)

【懇親会から参加】松井一乃(ワールドカップ自転車ツアー)

国立スポーツ科学センター (JISS)

1~2月例会を受けて発足した「ワールドカップ・プロジェクトII」の話題を中心に、ワールドカップの
“物語”をどう集めるかについて議論した。年度末であり、いくつかの会合と日程が重なっていたことも
あって参加者が少なく残念だったが、カリンカでの議論も含めるとかなり充実していた。

本報告は、当日の資料と参加者の発言(カリンカでの議論も含む)をもとに再構成し、参加者のチェック
を経て公表するものである。

<目次>

<1>国立スポーツ科学センター (JISS) について

1. 施設概要
2. 設立までの経緯
3. 事業について
4. その他
5. フットサルプロジェクト遂行上の問題点

<2>国立スポーツ科学センター施設見学会

<1>国立スポーツ科学センター (JISS) について

[講師: 浅見 俊雄氏 (国立スポーツ科学センター長)]

1. 施設概要

施設規模は全長 104m、奥行き 59.2m (サッカー場とほぼ同じ敷地面積)、高さ 31.6m (地下1階~地上
7階) 総工費: 274 億円。

2001年2月に完成、同年4月1日から機関として正式に設立し10月1日から開所し現在に至る。

国際競技力向上に向けたスポーツ医・科学研究の推進の中核期間としての役割を担うとともに、これらの研究成果を活かした科学的トレーニングや、スポーツ障害に対する医学的サポート、スポーツに関する各種情報の収集・蓄積・提供などを一体的に行う機関です。

スタッフ：専属研究者15名 契約研究員（任期3年）40名程度、運営部20名程度、他。

2. 設立までの経緯

古くは1960年に日本体育学会、大学体育協議会などから国立体育総合研究所設立の陳情書を政府に提出していた。その後も1972年の文部省保健体育審議会（以下、保体審という）の「体育・スポーツの普及振興に関する基本政策について」の答申、1979年文部省による「国立総合体育研究研修センター」構想に関する懇談会の開催などが行われるが実際の設立決定にまでは至らなかった。

1987年の臨時教育審議会にスポーツ界から唯一のメンバーとなった岡野俊一郎氏（現日本サッカー協会会長）の意見により、分科会の中にスポーツに関して議論をする場所が設立され、国立のスポーツ医科学研究所、トレーニングセンターの設立が日本のスポーツの振興に重要であることが提言されたことで、建設に向けて実際に動き始める契機となった。1988年「設置準備調査研究協力者会議」による報告、1989年保体審による設置計画推進の提言など JISS 建設への向けての速度が増した。1990年には当時行・財政改革が進んでいたことで新たな機関を作ることが難しく、スポーツを扱う既存の「日本体育・学校健康センター」が JISS を運営することとなり、建設予定地が渋谷区西原用地から「日本体育・学校健康センター」の所有地である北区・西が丘競技場敷地内に変更となり、1993年には設計が出来上がる。

しかし、1991年に長野オリンピックの開催が決定したことで、長野オリンピック関連施設の建設に国の予算が投入され、JISS 建設の予算が配分されない状況となった。

1997年には長野オリンピック関連施設の建設が終了し、以降予算が配分され、1998年より JISS の建設が開始され、2001年2月に竣工した。

3. 事業について

トータルスポーツクリニック事業、スポーツ医・科学研究事業、スポーツ診療事業、スポーツ情報サービス事業をメイン事業に、スポーツアカデミー支援事業、トレーニングキャンプ事業、サービス事業を含めて合計7事業を展開している。

自前で施設を持たないシンクロナイズドスイミング、レスリングなどの競技において活動の中心地とな

っているほか、サッカー日本代表もメディカルチェック、フィットネスチェックで利用したりしている。

4. その他

◆日本のメダル数は、アメリカ・ソ連・東欧の絶対的な力の前に、1972年ミュンヘンオリンピック以降低迷するが、日本と環境が似た国（イギリス、イタリア、オーストラリアなど）では、オーストラリアは1981年にJISSモデルにもなったAIS（Australian Institute of Sports）が完成、イギリスではロッテリーの売上の一部を資金に強化を図ったことでメダル数が上昇するなど、『やるべきことをやった国が成功している』。

◆日本では1982年アジア大会で中国に、1996年のアジア大会では韓国にもメダル数で抜かれ、アジア王座の座からアジア No.3 になってしまったことが政治的にJISS設立への大きな原動力となった。

< 2 > 国立スポーツ科学センター施設見学会

[案内役：堀 美和子氏（国立スポーツ科学センター）]

7Fのレストランから案内が始まった。レストランは選手への教育的意味を含め、ビュッフェ方式になっており、近くにはタッチパネル式の栄養分析装置が設備され、選んだ食事の栄養価を即座に計測できるようになっていた。5、6Fは、あわせて72室ある低酸素宿泊施設。部屋の構造はビジネスホテルとさほど変わらないが、低酸素状態による湿度低下をカバーする加湿器の設置などの工夫が見られた。3～4Fは体操競技の練習場や体育館、研究施設が配置されている。2Fは、今回利用した研修室や、ウェイトリフティングやレスリングのトレーニング施設が配置。これらのトレーニング施設には天井カメラやフォースプレートが多数設置されていた。1Fは運営部やスポーツクリニック、陸上競技実験室が設置されている。

日本のスポーツ医・科学・情報の中核機関の名に相応しい最新設備が豊富に設置された施設であった。中でも、最大60km/h、横3m×縦4mの大型トレッドミル（自転車競技、クロスカントリーのトレーニングにも使用）や環境制御室など他では見ることのできない設備に参加者は大きな興味を示していた。高価な機材が多数並んでいるが、単なる研究機関にとどまらず選手・コーチへの情報のフィードバックを非常に重視した実践的な競技力向上機関であった。

< 感想・意見（内藤隆） >

JISS から自転車で20分のところに生まれた頃から住む私は、仕事で観戦でと数多く西が丘サッカー場に通っており、JISSの建設の進行もこの目で見てきました。今でも会社から車で帰る時は、たまに家を通り過ぎ夜の西が丘にチーム必勝祈願（試合会場が西が丘でなくとも）に行ってしまうほど。その隣にそびえ立つJISSが日本の国際競技力の行く末を大きく担っていると思うと・・・感動でした。

JISSに関する議事録を書けたことをとてもうれしく思います。